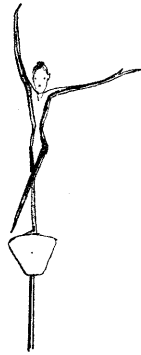


## 子どもの病氣と成長と



塚田幸子

猛暑の東京から、涼しさを通り越して朝晩は寒いほどの信州の高原に行った昨年の夏、小学一年の次女を筆頭に、家族全員が次々に風邪をひいてしまいました。夏風邪は長引くのが常ということを三年ぶりに思い起こしているこの頃です。というのも、三年間、米国コロラド州デンバーで生活し、一昨年十二月に帰国した私たち一家にとって、日本の風邪は実に久しぶりの体験だったからです。

帰国直後もまた超多忙で、各自がそれぞれに再び日本の生活にはいる為の諸々の手続きを経て一段落ついた冬休みは冬休みで、その季節の風邪で全員ダウンしていたことを思い出しますが、それよりもこの夏風邪はずっと厄介で長い間悩まされたのです。

それにつけても思うことは、大人たちは冬休みや夏休みというスケジュールが頭にあって、どっと気のゆるんだ時点で病氣の侵入を許してしまうというのはわかりま

すが、どうして子どもたちまで一緒にかかったのでしょうかということ。子どもたちは、大人の態度を敏感に感じとっているからでしょうか、あるいは、大人たちの注意の目が耳が働かなくなるからでしょうか、一家全員が風邪でダウンというパターンはよくあることのようにです。いずれにしても病気になるなり、悪化したりするのは、何か緊張を要することが一段落して、気のゆるみが出た時ということが多いように思います。その証拠かどうか、私たち一家は、デンバーで暮した三年間、寝こむほどの病気に全員がかかったことはありませんでした。二人の子どもたちが前後して原因不明の下痢とその後の高熱という症状を呈してそれぞれ一週間近く学校、幼稚園をお休みするということが一度あり、それが三年の内でも最も重い病気でした。それも渡米直後ではなく三度目の冬も終わりという早春の頃でした。これは、向こうではよくあるスタマックフルー（主として下痢が症状のインフルエンザ）だったことは途中でわかったのですが、このように、風邪と言っても彼の地では鼻やのどは何と

もなくて下痢をするタイプのものや、耳を痛めるタイプ（イヤ・インフエクション）ばかり、鼻水もなく咳もなしでは風邪をひいたという実感がなかったのかもしれない。同じアメリカでも他の州、他の土地ではまた違うようです。

三年と言えば、ようやくその土地になじんで、緊張感も薄れ始めた頃だったことでしょう。とりわけ次女については、帰国直前は現地の子どもになりきったかのように見えました。日本での生まれてから三年弱の生活とデンバーでの生活とが、ほぼ同じ長さになっていましたから無理ありません。次女が日本式の鼻づまりや鼻水、咳という風邪をひくと大変に厄介なものでした。上手に鼻もかめないのですし、咳こみながら熱さえなければ平時のように遊びまわってしまうのです。冷たい風に当たらないようにとか、直射日光にさらされないようにという注意をしても、トンボを追って出て行ってしまいますし、家の中で静かにしているように注意しても、ボールを見つけて結局とびはねて大汗をかいてしまうといった

始末でした。冬とは違って外の世界はあまりにも魅力的で、冬の風邪では起こらない心配と苦勞が重なり、自分までも風邪をひいて、この夏の後半は私には大変なものになってしまいました。

一時は気管支炎や肺炎にでもなったかしらと心配させられたものの祖父母の助けもあり、東京に帰ると次女の風邪も快方に向かい、今はホッと胸をなでおろしています。

そんな今、この次女の風邪のことを考えているのですが、この子どもにとっては、あるいは再び日本で暮らすに当たってぐりぬけねばならない門のひとつではなかったかと思うのです。この子は、この夏風邪の最中に、二本目の乳歯がぬけました。一か月ほど前の一本目の時にも食事をろくにとらず、痛がったり気にしたりして周囲に心配をまぎ散らしましたが、二本目も同様に大騒ぎしていました。今は三本目がぬけて夏休みも終わろうとしています。

こう述べてくるとこの子どもの夏休みが、夏風邪と乳

歯の生え変わりに終始していたように聞こえるかもしれませんが。けれども、林間学校の高校生と競い合うようにして、しっかりと自分の手足で山登りをしたり、トンボやバッタを何十匹もつかまえては放したことを等々の方が、成長により直接的に結びついていたということもできなような気が私にはするのです。

三本目の歯がぬけた時、より多くの出血に驚いて、シートやタオルでぬぐってしまった次女。この時、この子どもは、鏡でぬけた歯のあとを見て、その前にぬけた歯のあとに、新しい白い歯の先端が見えていることを発見します。そして大発見という面持ちで私に見せに来るのです。子どもより先に気づいていた私は驚いて見せるという演技をせずに、「そうよ、もっと前から生えてたわよ」などと言ってしまい、この子をかんかんに怒らせてしまうのです……。

そしてまた長かった夏風邪がこじれる寸前、祖父母が来訪して、つきっきりで額を冷やし、夜具をかけて看病してくれたことがよほど嬉しかったらしく、「風邪ひい

たら、こうやってタオルをぬらしておでこのつけるのね。「毛布をかけて、暑くてもがまんしてこうしているのね。」と実に嬉しそうな顔で大発見を私に語るのです。話をする時に、まるでおままごとでもするように動作をいれて、身体全体で演じています。

大人になってからも病の時には、平常とは異なる感じ方をしたり、鋭敏にものごとを感じとったりして、深く学び成長することがありますが、この子どもも、この長かった夏風邪では、歯の生え変わりと共に、大切なことをいくつも学んだことでしょう。

私自身はと言えば、この子どもの成長を見守りながら、日本に帰って、両親や多くの友人に囲まれて、気を許す時が多く持て、風邪をひいていられるというのが、妙に嬉しく心なごむものだと感じています。デンバーでは、決して病気にかかってはならない。絶対に事故を起こしてならないという強い構えがいつもあったものでした。病気をするゆとりもなく、子どもの成長を穏やかに見守るゆとりもなかったような気がするのです。

この次女がふともらした言葉、「また赤ちゃんにもどりたいなあ」というのも本当なら、「一日中寝てばかりいるのが赤ちゃんよ」と言われて、それは「いやだあ」というのも本当の気持ち、それは抱かれている子どもにも抱いている私にも共通にある思いです。

家中で一番幼ない存在で、いつも甘やかされている次女が「赤ちゃんにもどりたい」と言うのを聞いて、いつも「おねえさんじゃなくて妹になりたかった」と言っていた長女が、黙って見ていられたのも、「おねえちゃんだっておかあさんにだっこしたいけど、いつも先にNちゃんのがのってるんだもの」と長い間の沈黙を破って告白したふざけ合いのシーンがその前にあったからでしょう。

これらはすべて夏風邪の間にあったことでした。私自身十分にリラックサして気をぬいていたのでした。その為に夏風邪という代償を支払わねばならなかったとしても十分に有意義だったと言えるのではないかと今、私は思っています。